

開発業務を効率化する統合ソリューション

— 次世代システム構築基盤が提供するもの —



野村総合研究所 生産革新本部
生産革新ソリューション開発一部 副主任システムエンジニア

なかがわ なおき
中川 直樹

専門はライブラリー管理など開発ツール群の構築・導入

システム開発では今、生産性と品質の両立という高いレベルのマネジメントが求められており、アプリケーション開発および開発プロジェクト全体の効率化という視点で業務を支援する次世代システム構築基盤が求められている。本稿では、このニーズを見据えて野村総合研究所（NRI）が整備を進めている統合ソリューションの概要を紹介する。

プロジェクト現場の課題

新規開発か保守かにかかわらず、プロジェクトの現場では生産性向上や品質向上を目的としてさまざまなツールを導入し効果を上げてきた。しかし、その一方で以下のような課題も指摘される。

- ①開発と管理が分断されており、マネジャー層がプロジェクトの状況を把握するのに多くの手間を要する。
- ②ノウハウや資産がどこにあるか分からないために有効活用できない。
- ③ツールや情報を関係させるために多くの二重入力コストが発生する。

これらの課題は、工程や分野ごとに特化されたツールを導入し、部分最適のみを推し進めてきたことに起因している。すなわち、工程や分野間のツール関係などが十分に考慮されておらず、アプリケーション開発者および開発業務全体という視点からの最適化が不十分だったのである。

近年、NRIではこのような課題に関する相談を受けるケースが増えている。

統合ソリューションとしての次世代システム構築基盤

NRIの次世代システム構築基盤は、アプリケーション開発の最適化と開発プロジェクト全体の最適化を考慮し、ツール関係を実現した統合ソリューションである（図1参照）。

①ポータル・共通機能

開発業務に必要な各機能へのアクセスをワンストップで提供する。

②開発管理支援機能

プロジェクト管理情報を一元管理し、スピーディーな可視化を可能とすることで、生産性向上や将来プロジェクトへのデータ活用を実現する。

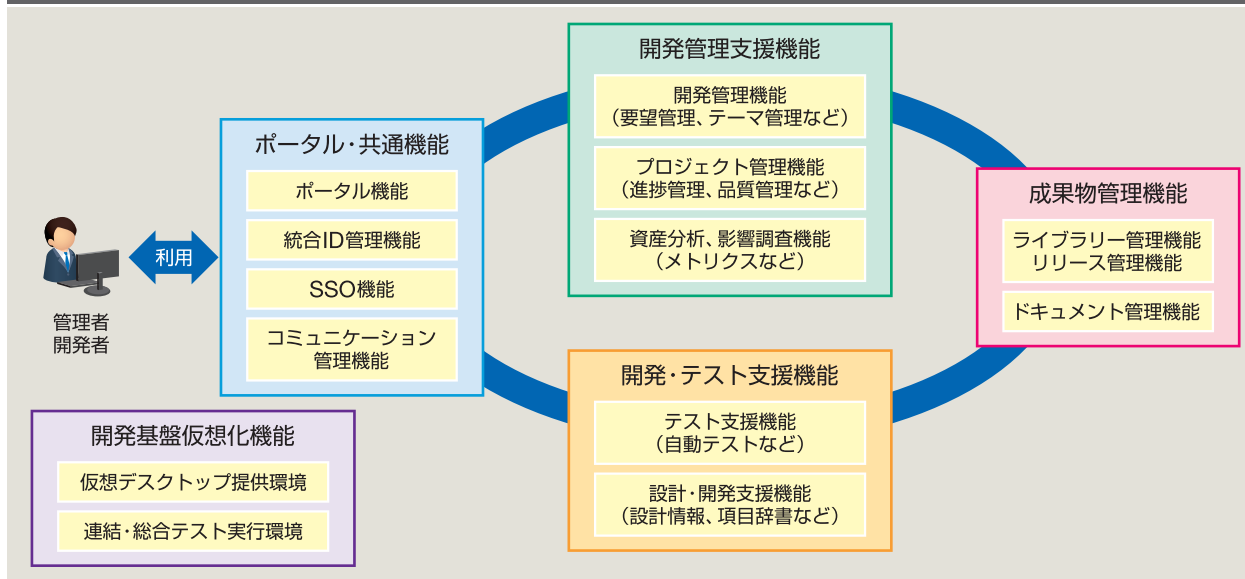
③成果物管理機能

開発テーマの確定からリリースまでの管理情報と開発成果物をひも付けることにより、成果物管理業務を効率化する。

④開発・テスト支援機能

設計・開発・テスト工程の成果物を半自動生成するとともに、テストを自動化することで生産性と品質の向上を実現する。

図1 統合ソリューションの全体像



⑤ 開発基盤仮想化機能

上記の開発者環境、連結・総合テスト実行環境などをネットワークを通じて仮想化基盤として提供することで、環境統制と環境準備のコストを削減する。

統合ソリューションによる開発業務のイメージ

統合ソリューションを導入すると、冒頭で述べた課題は以下のように解決される。

① プロジェクト状況の詳細な把握が可能

ソースコードの変更履歴、品質、外注先からの納品状況、モジュールの配布状況、障害への対応状況など、システム開発に関わる全ての情報が開発テーマ単位で一元的に管理される。プロジェクトマネージャーなどの管理層はこの情報にアクセスすることで、プロジェクトの詳細な状況を迅速に把握できるようになる。経営層やステークホルダー（利害関係者）への報告も、要件単位にタイムリーかつ

少ない負荷で行える。

② 過去の資産の再利用などが容易

新規開発から保守までの情報が一元的に管理されるため、設計情報やソースコードなどの検索性に優れる。これにより、実績データなど過去の資産を再利用したり、意思決定に生かしたりすることが容易になる。

③ シームレスな情報連係で無駄を排除

情報がツール間でシームレスに連係されるため、情報を1箇所を集約・蓄積することができ、複数のツールや管理表へ二重に入力するなどの無駄を排除できる。

標準開発基盤を目指して

統合ソリューションは、社内の大型プロジェクトへ導入しつつNRIの標準開発基盤とすべく整備を進めている。最終的には外販も視野に入れており、広く企業における標準開発基盤として生産性向上、品質向上に寄与できるようにしたいと考えている。